

# 大地と共存する放牧養豚の営み

十勝しんむら牧場



75haの草地で120頭ほどの乳牛を飼養する「十勝しんむら牧場」は、2015年から新たに放牧養豚を始めました。豚たちは、本来の習性を発揮しながら、1年じゅう広大な山林で暮らし、生態系の一部になっています。

## 放牧酪農、につづく分野へ

「十勝しんむら牧場」の酪農は、1933(昭和8)年に富山県から上士幌に入植した初代が、その数年後に乳牛を導入したのが始まりです。

「動物本来の生態に近づくことで、牛を牛らしく健康的に飼える。環境に負荷をかけず、生産物を直接販売して価格の決定権を持ちたい」

と、90年代半ばに就農した4代目の新村浩隆さん(1971年生まれ)は、舎飼いから放牧酪農へ転換。2000年には国産初の「ミルクジャム」の開発に成功し、牛乳や乳製品の製造・販売事業も手がけています。そうした中で、「牛だけでなく、馬や豚、山羊なども

暮らせる牧場を創ろう」と考え、養豚場の見学や勉強会を重ねました。

そして2015年、恵庭市内にある農業と環境のコミュニティ「えこりん村」から、生後1年の三元豚3頭を導入したのが放牧養豚の始まりです。

## 豚も森の生態系のひとつ

「豚はもともとイノシシなので、牧草地ではなく、山で飼ってこそ魅力がある。牧場の独自性を打ち出し、豚が本来持っている能力を引き出せないか」

と模索し、牛を入れても使いにくく、機械作業のできない未利用地に放牧することにしました。

ブランド名は「<sup>やまもりのぶた</sup>山森野豚」。放牧された豚たちは、草や笹、木の根、穀物をメインにしたペレット状の飼料などを食べて育ちます。木の根元で分娩して子育てしたり、飼料を食べ終わると森の中に消えていく、寝る時は鼻で穴を掘り横たわる——豚の習性や生理・生態に適う、満たされて生きる姿が見られます。

見学会(21年7月開催)の時には、豚は雄1頭、雌65頭に増え、山羊や馬も一緒に放牧されていました。多くの養豚場では生後6カ月ほどで出荷しますが、ここでは1~2年間かけて飼

山林に放牧されている豚たち

育。「山森野豚」の肉をハンバーグやソーセージに加工・販売するなど、牛

乳・乳製品と併せた畜産経営の可能性を追求しています。(滝川 康治)



新村浩隆さんから放牧の説明を聴く見学会の参加者(21年7月)



体温調節などのため泥だらけになり樹木に体を擦りつけて身繕い

## 「遊」運営スタッフの感想から

動物が動物らしく幸せそうに過ごしている姿は、いつ見ても感動的です。広い牧草地では牛がのびのびと草を食べながら歩き、森の中では豚が仲間と時に走り、お互い声を掛け、泥の中で身体を冷やし、思い思いに過ごしていました。

動物の健康な身体づくりは土づくりから。栄養価の高い牧草をたくさん食べているお母さん牛の糞は全くの無臭!それがまた土に還り、豊かな土壌をつくります。

豚ちゃんは歯も尻尾も切られることなく、この環境でゆっくりと育ちます。そして、ワクチンに頼らない。免疫を上げるにはストレスを減らすこと、健康な食事と運動、あらためて人間と同じだと思いました。(瀬川 綾子)

森の中で育つ豚たちは、木で体を掻いたり、土を掘って必要な栄養をとったり、泥を体に塗りたいくったり(体温調節、寄生虫対策を自分でする)、自由に暮らしていた。

頭数に対しての面積も十分過ぎるほど広く、すばらしい環境だ。豚もこの森の生態系の一部なのだと感じた。

ちなみに、現在の養豚のシステムでは、妊娠している母豚は体ギリギリのスペースの檻に入れられ、餌と水を口ににする以外やることのないような飼育方法が主流だ(ストレスから檻を噛む豚もいる)。2018年時点で日本の約90%がこの方法を取り入れている。

(菊地 純子)

(有)十勝しんむら牧場

北海道士幌町上音更西1線261

☎ 01564-2-3923

H P <https://milkjam.net/>